

# 私の「猫かぶり」面接体験記

柴崎昭則

私が就職活動をしたのは、もう一〇年以上も前のことになる。特に編集者になりたいと思っていたわけではなく、出版社、編集プロダクション、新聞社、教科書会社、中学校向けの進学テスト業者、良妻賢母主義教育で知られる私立女子高、途上国関連の研究をする研究機関など、「できそうな」仕事、あるいは「入れてくれそうな」会社を見つけては、手当たり次第に応募していた。

どうして業界研究や会社訪問といった「普通の」就職活動をしなかったのかといえば、学歴の問題があったからだ。当時私は、大学院の博士課程前期課程（いわゆるマスターコース）に在学中。理系ならともかく、文系の、しかも日本近現代史専攻である。大学院入試

の際にも、「大学院という学歴は就職の役に立たないけどいいか」と念を押されたくらいのもので、普通の就職活動など望むべくもない。そう、「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」。当時の（今でも、かもしれないが）文系大学院出という学歴は、企業の求める「ちよいどいい学歴」ではなかったのである。

セオリー無視の就職活動をしていた割りに、一次の筆記試験は合格することが多かった。もっとも、二次以降の面接は不合格の嵐。しかし落ち込むほどではなく（少しブルーな気分になったのは事実だが）、面接なんて結局は相性だから、と割り切って次の採用試験を物色していた。

考えてもみてほしい。同じ人を面接しても

「言うことを聞きそうだからいい」と判断する面接官もいれば、「言われたことしかやらないからダメ」と判断する面接官もある。こちらが面接官を選べない以上、可否は時の運なのだ。

面接も数をこなしてくると、何となくコツがつかめるようになる。要するに、その会社が望むような人間像を想定し、そうした人間像を演じられるかどうかのカギなのだ。就職活動の最初のころ、公務員試験などの実用書で知られる出版社を受けたことがある。「どんな本を作りたいですか？」と聞かれた私は「社会に問題提起をするような本を作りたい」と答えてしまった。今から振り返ると、うぶだったんだなあ、とつくづく思う。その出版

社にしてみれば、社会に問題提起する本など作ってもらっては困るのだ。文句も言わずに公務員試験の問題集を作ってくれるような人間こそ採用したいのだから。

ただ、自分自身とまったく違う人間像を演じざることは難しい。難しいだけでなく、そんなことをして就職したら後が大変だ。何しろ「猫をかぶった」わけで、会社に入った後も猫のかぶり物をしたままでいるのは相当にきつい。そこで私は、三分の二くらいはかぶり物をして、残りの三分の一くらいは本音を言う、という作戦に出た。たとえばこんなふうに。「ネクラ（根が暗い）とかネアカ（根が明るい）とか言いますが、あなた自身はどちらだと思えますか？」「どちらかと言われればネクラだと思えますが、人間、根が明るくてチャラチャラしていればいいというものではないと思います。これが模範解答というのではなく、この程度に本音を言って入れような会社でなければ長く勤めることはできないということなのだ。

そんなこんなで就職して、書籍編集者として約一〇年（正確には九年九カ月）過ごした後、私は会社を辞めた。かぶり物をしているのがつらくなったからではなく（かぶり物は

一年もたないうちに脱いでしまっていた）、会社の方針と自分のやりたいことが微妙にずれてきたからだ。会社を辞めた翌年、ある出版社の中途採用に応募したことがある。軽い気持ちで履歴書などを提出したのだが、何と書類選考に通ってしまった。そしてこのときの面接では、本音を全開することになったのである。

面接官の最初の質問は「大学院を出ていらっしゃいますが、どうして研究者の道に進まなかったのですか」。これから就職活動をする人たちも、似たような質問を受けることがあるだろう。「どうして四年制大学（あるいは専門学校）に進学しなかったんですか」という質問を。

この種の質問をする面接官の意図は二つある。一つは、単に聞いているだけの場合。これなら、きちんとした受け答え（短大でやりたいことがあった、など）をすればすぐに別の質問に切り替わる。もう一つは、最初から採用するつもりがなくて聞いている場合。ちゃんと答えているのにしつこく聞いてくるようだったら、こちらだと思ってい。

中途採用の応募者に対して、これまでのキャリアではなく一〇年以上も前の大学院の話

を持ち出してくるのは、もちろん「採用しない」という意思表示だ。しかも「研究者の道に進んだ方がよかったのでは」などと大きなお世話を言ってくる。「おいおい、ここは進路相談室か」などと思いつつ面接官の暇つぶしにつきあっていたが、「どんな本が印象に残っていますか」という質問が出たとき、このあたりが潮時だと判断した。その出版社から刊行された翻訳書（マイクロソフトの創業者、ビル・ゲイツの伝記だった）を取り上げ、よく知られた訳者であるにもかかわらずあまりにも誤訳が多いこと、この種の本は訳者の知名度で売れ行きが変わるものではないこと、さらに「私が作ればこんなぶざまな本（カバ）の著者名を誤植していた）にはならなかったでしょう」と言いたいことを言って、面接会場を後にしたのだった。

どこまでかぶり物をして、どこまで本音を言うか——このバランスは人によって違うだろう。でも、ときにはかぶり物を脱ぎ捨ててしまいうくらい思い切りも必要だ。脈のない面接につきあう義理はないし、つきあったところでストレスをためるだけ。人生は一度きりなのだ。気持ちを楽にして、めりはりのある就職活動をしてほしい。